

一年に十三か月ありし冬長屋に人は和して暮らしき  
谷岡亜紀

太陽暦が採用される以前、陰暦で生活していたころの日本には閏月というのがあった。閏月のあるその年は一年が十三か月になる。そんな時代の庶民の生活を幻想する一首。下旬、落語の世界のイメージで、上旬を軽く受けている。

星<sup>ゾク</sup> 豚<sup>ナバ</sup> 青空<sup>ゾク</sup> 西瓜<sup>ヘン</sup> 乾燥<sup>ゾク</sup> あたたかな苗字の多  
佐佐木頼綱

「星<sup>ゾク</sup>豚<sup>ナバ</sup>……」はタイの苗字らしい。外国人からみれば、日本にも奇妙な苗字が多いのだろうが、私たち日本人から見ると奇妙な苗字がある国も少なくない。私を知っている例ではオランダ。王様、うなぎ、ペーコン等々、えっと思ってしまう苗字がある。一首、不思議な苗字を受けての、「あたたかな苗字」「国境の村」が、うまい。

華氏百度の乾いた町の日没は龍舌蘭の媚薬の香り  
曲瀬江里子

一首の場面は日本の本土ではないらしい。日本ならば沖繩か。一首では、龍舌蘭が街路樹になっているらしいので、メキシコあたりかもしれない。華氏百度は摂氏でいうと三十八度近い。別バージョンの世界に連れ出されたような、不思議な空気が魅力。

花の香を雨に伝えて地に這わす火曜日の後金木屋  
三宅徹夫

雨に打たれて金木屋の花も香りも空中から地上に移行

## 短歌の現在

### No.430 今月の15首を読む

#### 佐佐木幸綱

した、の意味だろう。金木屋を主語にして、彼（彼女かも）の意志で、一切が進行したかたちにした表現的な工夫が見どころ。

髪<sup>ハ</sup>の毛と心をとがらせ子どもらは二十歳<sup>ハタチ</sup>の我を先生と呼ぶ  
西村康平

斎藤佐知子選者が特選にしている一連中の作。場面は塾の教室だろう。二十歳から見た十歳前後の少年少女たちである。育ちざかりの生命の、何かこう鋭い感じをうまく表現した上旬に注目する。

窓多き家に住みまし風通しよき窓あけて君と住みまし  
新留紀代美

この作者の今月の一連は「窓」が主題である。詳しい事情は分からないが、病院だろうか、しばらく母上が窓のない部屋に住んでおられたらしい。それにかかわる何首かがあって、この作が置かれている。ふだんそれほど注意のゆかない窓をあえてクローズアップした。欲を言えば、季節、時間などを入れてもう少し窓にニュアンスをもたせて欲しかった。

ほかほかにご飯も炊けた五時半のチャイムなりおり  
鐘ヶ江理映子

子供が木苺公園で遊んでいる場面。チャイムを合図に帰ってくるのだ。童謡ふうな、どこか懐かしい言葉づかいが持ち味。

つくづくとイデオロギーに縛られぬいまの運動を羨しと思ふ  
坂口弘